

「訪中団感想文」 浅井祐介

2019年12月20日から24日にかけて日中友好大学生訪中団の一員として中国・北京を訪れた。限られた時間と体験の中ではあったが、訪中以前には認識していなかった中国の強さと弱さを垣間見る結果となった。何よりも「自らの身を持って中国を体感できたことが」今回の訪中を大変実り多く考えさせられる体験にさせてくれたに違いない。

訪中に応募した動機は滞在経験のある「世界の覇権国米国」と国際社会において対をなす「新興著しい中国」を自分の目で比較検討することを希望していたからだ。また同時に同年代の中国人大学生と対話を試みることも希望した。

今回の訪中の中で様々な中国の名所を訪れプログラムに参加する中でとりわけ「天安門広場訪問」と「日中大学生千人交流会」が鮮烈に印象に残る体験となった。両体験を通じ中国が抱える「強さ」と「弱さ」を垣間見ることができた。

まずは天安門広場について書き連ねたい。日本で学習する世界史にも登場し「人民が戦車の前に立って抗議する姿を連想させる」言わずと知れた北京の名所であるが、その広さと貫禄は酷く驚嘆させられるものであった。世界中の報道でも度々映し出されるその姿はまさに中国のシンボルであり、並々ならぬ威厳を放っていた。同広場に対しては昨年10月に執り行われた国慶節のイメージも持ち合わせていたが、まさに中国の歴史を紡いできた心臓という表現がふさわしい雰囲気には包まれていた。国慶節の軍事パレードで約15000人もの兵士、戦車、ミサイル、先端技術を搭載した無人機等を展開され、さらには習主席が「われわれの偉大な祖国の地位を揺るがす力はない、中華民族の歩みを阻むものはない」と発言した自信の裏付けに思わず納得してしまう空間であった。しかし一方で、広場では至る所で警官が見られ、あたかもテロやデモ等の発生に備えているような雰囲気も確かに存在していた。「中国共産党が突発的な民衆の反乱による国家の転覆を恐れている」というメッセージが図らずも見受けられたような印象を受けた。昨今の香港・台湾情勢が激動の時代を迎える中、人民の統制に習主席と中国政府が強い関心を示していることを物語っていた。

次に「日中大学生千人交流会」も私にとって中国の国力やお国柄について酷く考えさせられた。まず日本の式典に比べ圧倒的に要人にお話をいただく時間が長い。集権的と表現される中国社会を今訪中で最も強く意識させられる時間となった。さらに本交流会は「中国と日本の国力の差をまじまじと見せつけられた」と感じる機会となった。演舞と学生代表の演説は明らかに日本人大学生が披露したモノよりも優れており、何か中国国力を体現した威圧感あるいは畏怖に近いものを感じた。例えばダンスにしてもオーケストラにしても参加者全員が寸分狂いなく披露されるように周到な準備が施されていた。私はこの「中国人の一つの物事に取り組む姿勢」酷く驚かされた。言い換えれば13億人を超える人口を持つ中国から選抜された学生の能力に感心し、中国政府の「行事への気合の入れ方」にも驚嘆させられた。中国は単純に日本の10倍以上の規模の人口を有し相対的に優れた人々が集まる国ではあるのかもしれないが、そのような人々と今後の国際社会で日本人として渡り合っていくこと難しさを痛感した。また「あくまでも経験からの推測の域を出ない」と事前に断っておきたいが、現在日本企業が中国企業と世界市場で厳しい闘いを強いられている現状の根本的な原因を垣間見たような印象さえ受けた。ただ日本人学生も日本の将来を悲観ばかりする必要はない。日本人大学生が中国人大学生相手に自らの国際経験や英語力を駆使し優れた対話力で会話をリードする姿も幾度となく訪中プログラム全体を通じて見られたからだ。日本にも依然として中国に負けず劣らずの文化や人材が存在しているに違いない。

場面場面を切り取って自らの感想を述べたが、中国との友好的国際関係がこれからの日本国に非常に重要であると再認識した。今訪中団で私の「中国を見る目」は大きく変化した。今後も中国情勢や日中関係を注視していき、将来は二国や世界を股に活躍できる人材へと成長を遂げていきたい。

最後に今回大学生時訪中団事業にご協力いただき、貴重な機会を提供していただいた全ての方々に厚く御礼を申し上げます。

「中国人と日本人の輪を広げて」 浅野亜理紗

訪中時点で私は2度中国へ訪れたことがあります。上海周辺と雲南と、そして今回は初めて中国の首都である北京に訪問させていただきました。中国はとてつもなく広大な国土を有する国家であるために、今回の北京訪問での新たな発見はそう少なくはありませんでした。しかしその中でも特に肌身で感じたことは他人との関係性と、中国の日中友好に対する熱い思いです。

中国へ2度訪れたことはありましたが今回が初めて公式での中国訪問であったために、多くの中国人と接する機会がありました。その中で特別感じたのが他人との関係性です。日本人はどうしても相手にしつこいと思われまいように何でも控えめに伝えたり、控えめに接したりする傾向が文化的傾向にあると思いますが、中国ではとにかく自分の意見をはっきりと伝えることの重要

性が見受けられました。市場で値切る際のやりとりはもちろんのこと、日本では「お客様は神様主義」ですが、自分の利益も考えつつ二人が満足する価格を相談しあうのはとても新鮮な体験でありました。2日目の夜に行われた晚餐会と最終日の前日の夜に行われた中日青年千人大会交流大会においては、中国側の日本に対する友好関係を深めようという意気込みが感じられました。かなり公式なもので、本当を言えば現地の中国人学生と交流する機会は自分で作らないとないに等しい状況でしたので、自分から待ち時間や開始期前に積極的に友達と話しかけに行きました。突然私が話しかけても、温厚に対応してくださり、写真を撮ったり、日本について知っていることを教えてくれたりなど、最後には連絡先を交換してまたどちらかがどちらかの国に旅行するときに会おうという約束もしました。

ここ数年、来日中国人が日本の国外からの海外観光客の中で5位以内に占めるほど多く、日本が好きだという中国青年は少なくはありません。一方で、日本においては「自分は中国好きだ」というと少数派であると感じることがとても多いです。ですが今回この訪中団に参加させていただいたことで、自分にも「中国好き」の仲間と出会えることができとてもいい経験ができました。しかしやはりまだまだ日本では「中国」と聞くと関わりづらかったり、意外に思われる方も多く、在日中国人は中国人ネットワークに依存して日本人との関わりが薄かったりという方もいらっしゃると思います。この経験を機に、改めてお互いが自分たちの国籍同士で固まるのではなく、日本人中国人関係なく接することができ、助け合えることができるコミュニティの基盤を作るために努力していかなければならないと感じました。

そのためには、中国人の文化や慣習、傾向を知るのみではなく、日本人同士のつながりや日本をよく理解するべきであると思います。私たちが歓迎してくれた中国に対して、次は私たちが恩返しをするために頑張っていきたいと思います。まだまだ中国の表面しか知らないところもありますが、これからも引き続き中国について関心を持ち続け、交流の心を忘れないように毎日過ごしていこうと思います。

「相手を知ることが友好を作る」 阿部初音

思えば私の大学生活は中国と常に繋がっていた。大学に入学してすぐに「一番近くて知らない国」というイメージのあった中国の文化を専攻として選んだ。同じく漢字を使う言語を話し、日本と関わりの深い国として登場し、日本からも一番近い国であるのに、大学入学当初、18歳の私は、中国という国のことを何も知らなかったのだ。それから4年が経ち、1度の台湾留学を経験した私は、4年前の自分には想像もつかないような中国漬けの毎日を送っている。だが、私は圧倒的に中国を自分の目で見て感じた経験が少なく、そのことに対してはもやもやとした気持ちを抱いていた。確かに研究室で毎日たくさんの中国人留学生の先輩方に囲まれてはいるが、台湾・香港を除いて私の中国本土を訪問した経験は、2017年の内閣府中国派遣団に参加した一度きりである。こんなにも訪中経験が少ないのに、本やインターネットで得られる一部の情報を見て、中国を理解した気になっていいのだろうか。そんなことを考えていた最中に今回の訪中団の募集の話があり、訪中したいという思いでいっぱいだった私はすぐに飛びついたのである。

私が訪中への思いを募らせていた理由は主に二つである。自身の中国語能力を試したい、今の中国の発展を見たい。今回の訪中団でもこの二つを目標として行動することとした。前回の2017年の訪中時、私はまだ大学2年生で留学経験もなく、中国語が全くと言え程話せず、とても悔しい思いをしたことを覚えている。それから2年が経ち、日常会話や軽い議論程度であれば中国語のできるようになったため、その力を中国本土で試したいと強く感じていた。また、中国は今、経済や産業を代表として様々な領域が驚異的なスピードで成長している。中国文化専攻ということもあり、友人等に中国の経済発展について聞かれることがよくあるが、実際に自分の目で成長の過程を見ていない私はうまく答えられずにいた。大国であり、経済成長が著しいことは理解しているが、ディテールまでは伝えられない。そんな自分がもどかしく、悔しいと感じていたため、今回の訪中では必ず成長の様子を正しく伝えられるようにしたいと考えていたのだ。

実際に5日間の訪中を終え、私が強く感じたのは「相手を知ることの大切さ」である。今回前述した二つの目標を掲げて中国を訪問したが、2年前の訪中時よりも知識や経験の吸収が早かったように思う。それは、私が中国語を覚え、大学生活で中国人と関わり、中国の文化を理解しようとしていたからに他ならない。中国語が話せるようになったことで、中国人との交流の場を主催側に与えてもらわなくても交流ができた。万里の長城ではすれ違った旅行者と、街中では店員たちと、日中青年友好大会ではたまたまトイレに並んでいるときに後ろにいた中国側の大学生と、交流する機会を与えられなくても、自分から縁を作り出すことができた。そして、そこで新しい知識を得て、中国の人々の賢さややさしさに感嘆した。これは、私が中国語を学んでいなければ起こりえなかったことである。そして、中国の知識が増えたことにより、訪中団での活動の中で教えてもらったことを更に掘り下げることができたように思う。起業施設の訪問の際も、自分から積極的に質問することができるようになり、中国の経済発展のディテールを少しは知ることができたのではないだろうか。

たまに会話の中で「中国を専攻しているなんて変わってるね、中国ってよくわからない」と言われることがある。私も大学入学まではそのような考えを持っていたので、このような感想を持つ気持ちもわからなくはない。だが、今回の訪中を通して、中国がよくわからない国なのではなく、私たちが知ろうとしていないということを強く感じた。私たちが知ろうとすれば、中国にはたくさんの魅力があるということにも気づくことができるし、中国人のやさしさや賢さに気づくこともできる。世界経済だってもっと理解できるよ

うになるだろう。隣人である中国と友好関係を続けていくためにも、相手を知る努力を惜しんではいけない。

「訪中を終えて考えたこと」 出地佑希

今回訪中団に参加したのは、私自身が中国に対し熱い思いがあって将来、日中友好を実現する為の何か手がかりを得たいと思っていたところ、ちょうど千葉県日中友好協会の方から声をかけていただいたことが最初のきっかけです。推薦していただき本当に感謝しています。

今回、初の真冬の中国に行くことになって、出発前に北京で初雪を観測したと聞いていたので寒さで病氣しないかと心配でいっぱいでした。防寒対策をしっかりと、訪中 1 日目は夜に羽田から出発しました。北京に到着し、ホテルに着いた頃にはすでに日を越していました。バスを降りると吐く息、鼻息までが白く、その時にやっと北京に着いたなど実感することができました。

2 日目の午前是北京城市学院へ行き、中国の文化体験として私は紙をはさみや彫刻刀などで切って、模様を作っていく剪紙を体験しました。縁起の良いとされる“囍”、“寿”などの文字は比較的簡単にできるのですが、最後に作った蝶々は細部まで神経を使わなければいけなかったのが、不器用な私にとって大変な作業でした。

午後は、中日両国のシンボリック的存在である「万里の長城」と「富士山」から名付けられた長富宮飯店で歓迎会があり、そこで現地の大学生と日本人大学生が互いに舞台上で歌やダンスなどを披露し、交流をしました。そこで気づいたのは、中国人は前に立つときは絶対手を抜かず、全力で取り組むことです。我々は歓迎される側ではあったのですが、そこまで熱烈に歓迎されれば、何かお返ししなければならぬと思うし、日本人は中国人に対して悪いところばかりを注目がちですが、我々が見習うべきところもあるのではないかと、この会に出席して改めて考えさせられました。

3 日目、世界遺産の万里の長城に登ってきました。中国にはこんなことわざがあります。“万里の長城に行かなければ好漢とは言えない”。意味は、決めたことや目的を達成せず、途中で投げ出してしまう者は、立派な男(人間)とは言えないです。初めて長城に来た時は目標を立てずに登ってしまい、諦めてしまったのを思い出しました。そんなのを考えたときに、ここまで巨大な城壁を作るのは中国人にしか成し遂げることができなかったのが本当に尊敬してしまいました。

4 日目は今回訪中の一大イベントの人民大会堂で開催される中日学生 1000 人交流大会に行ってきました。滅多に立ち入ることができない今回の会場に緊張と期待を胸に恐る恐る入場すると、普段は撮影が許可されないであろうという箇所でも写真が許されて、物凄い優待を受けているなど感じると同時に貴重な経験をさせていただいた中国政府に感謝でいっぱいでした。開会式では、各界のお偉いさんたちが挨拶をする場面、カンフー、合唱、代表挨拶などの出し物などが主でした。その中で、私は通訳する人に注目して見ていました。今回、いろんな場面で中国人が喋る日本語を聞くことできたのですが、第一印象は我々が普段話す言葉より大分丁寧に話されていることです。その上、流暢で言語を学ぶ同士見習うべき所がたくさんあり勉強になりました。普段大学に在ると、視野が狭くなり、考えも偏りがちになってしまいますが、今回の訪中団には全国の選ばれた学生が終結し、様々な情報を共有でき、これから生きて行く為のヒントや道を教えてくれたり、与えたりできるので、訪中団のようなイベントは絶対やるべきだと思いました。将来は現時点では、私は中国語を教える立場に成りたいと考えています。日中友好を築くには、形はどうであれ気持ちがあれば必ず実現できると思います。また各県にある日中友好協会に所属すれば、なにか役に立てることも知れました。短い期間でありましたが大変有意義な経験でした。ありがとうございました。

「訪中後の中国への印象の変化」 大内翠

今回の訪中に参加して私が中国に持つイメージが 180 度変わりました。今回の訪中は私にとってこれからの人生を歩んでいく中で大きな経験につながったと思います

中国に行く前は中国人のイメージはとても気が強く、頑固で、日本人とはあまり馬が合わないというイメージがありました。また中国は空気が悪くて汚いという情報がいろいろなところから入ってきていたのであまりプラスなイメージは持っていませんでした。しかし、今回の訪中で実際に中国を目で見て、実際に中国の方との交流で今までの中国に対するイメージや入ってくる情報がまったく違うものだということに気づきました。

まず、中国の方はとても積極的な方が多いイメージがありましたが、実際はみなさんとても私たちに気を遣ってくださり、適度な距離感で私たちの輪の中に入ってきました。中国の方はとても穏やかな人たちがばかりで、話していてとても心地のよい雰囲気になりました。訪中の中で中国の方はとても私たち日本人に興味があるということがわかりました。日本の土地の事や学校生活、普段の日常など、たくさんの事を私たちに質問をしてきました、私たちの事を中国人の方はよく理解して距離を縮めてくれようとしてくれたのだと思います。それを知った時は本当に嬉しかったです。

次に、中国はあまり日本人には生活がづらいというイメージがありましたが、実際はそんな事は全くないということがわかりました。どこに行くにも中国の方々が、助けてくださいました、道に迷ってしまったときは、どうしたの、大丈夫ですか。などあちらから声をかけていただきました。そのお陰で、私は訪中中、特に道に迷っておいていかれる事も無く、無事に日本に帰ってくる事ができました、日本はやはり清潔を大切にしている国なのでトイレや公共の場所などはやはり日本の方がきれいだけれど、中国も気を

遣っているのは伝わってきました。

中国は歴史的建造物が多くあることがわかりました、特に私は万里の長城に登った事がとても印象に残っています。登るのはとても大変でしたが、1時間かけて登りきった時はとても言葉では言い表せないような感動で胸がいっぱいになりました。その登っている途中でも、現地の中国人の方が私たちを励ましてくださいました。そのお陰で最後まで諦めることなく登り切ることができました。とても良い経験をさせていただきました。

今回の訪中を通して、中国に限らず、イメージや情報だけで何かを決めつけてはいけないのだということを学びました。実際に中国にいったりしてみても全く違うイメージを持つことができたし、貴重な経験としてこれからの人生に役立つと思いました。日本に帰ってきて、日本が本当に自分の故郷で私にとっては住みやすい国なのだという、日本に対してのイメージも変わりました、この訪中で中国だけでなくいろいろな事がわたしのなかで良い方向に変わっていきました。この経験を生かしてこれからも中国との交流をしていこうと思いました。

「亲爱的中国和朋友们」 尾原真子

谢谢大家!参加者皆様をはじめ、プログラムの運営の方々、推進するの方々、引率の方々、訪中国に関わる全ての方々、ありがとうございます。出会うことができた皆様に感謝申し上げます。

私の夢は世界平和に貢献できる人間になることである。具体的には、エンターテインメントの仕事で有力な人材になるために、仕事で力をつけながら、世界平和を唱えられる人物になることが目標である。幼少期からアメリカ志向だった。進路は変わることはないが、たどり着くまでの道のり上で方向転換する視野の広さを与えてくれたのが中国との出会いである。現在中国でも映画産業が盛んであるため、アジア全体で仕事を通じて成長することを望んでいる。最終地点はアメリカを拠点にしながら世界で動ける人間になることだ。まずは、アジアの大国中国から、学ぶべき多量のことを着実に身に付けたく日中友好関係のプログラムに幾つか参加しはじめ、今回の訪中団参加に至る。目標実現までの道のりは険しく、この上ない難しさも伴うことであろう。そこには、恐怖に出会うかもしれない。だが、訪中の5日間の貴重で楽しい瞬間や最高の仲間との出会いが私を奮い立たせてくれることであろう。自身に大きな力を発揮してくれる。それほどまでに友達との出会いは自分を強くし、自信へと結びつける。多くの失敗や好ましくない出来事がある中で、過去を肯定できるのはたくさんの友達の存在という宝があるからだ。友達に出会えた過去を絶対に消すことはできない。素晴らしい仲間に出会えば出会うほどこれでよかったのだと感ぜられる。日中友好を通じて運命的に出会える仲間たちは最高の存在であり、私にとってアドレナリンでしかない。仲間の輪を生涯かけて大切にするとここに誓いたい。あらゆる条件に捉われず皆に対しての人間愛を伝えたい。世界中の人々は地球人であり変わることをない同じ価値を持って生きている。絶対に忘れてはならないことである。世界平和を実現するために、人間個々に相手の良さを見出して関わり続けたい。

訪中の収穫は大きく3点ある。1つは、覚悟が強まったことだ。一生涯中国と関わること、日中友好を盛り上げること、中国との関わりを深く繋げ続ける覚悟がさらに固くなった。私の中国愛も更に深くなった。中国は魅力的な国である。日本と違う社会の空気感。中華料理のように、量やカロリーを多めに客に与え、もてなす太っ腹感。決めるところは決めて緩いところは雑把。条件の良し悪しにかかわらず希望を持たせる社会な気がしている。2つ目は1番大事であり大きい収穫である。仲間の輪が広まったことである。私の友人の友人が参加していて出会える人もいた。友達の友達は皆友達であることに確信を感じられるような気がした。友達の結びつきは感動的なものだ。日中友好を望む、同じ思いを持って集まった仲間だからこそ絆も深まりやすかった。心がわくわくするような言葉にできない喜びがある。3つ目は、観光、新たに美しいものを見ることができた。私は中国を愛している。好きと言う感情は理屈ではない、その人に対して条件を超えて感じてしまう本能的なものが愛なのだと思う。

問題点・反省点としては、日本の出し物に引け目を感じた。比べることはないが劣っていると毎度のことを感じるのが本音である。準備にかけた時間や努力の結晶が丸裸にされている。心で魅せたらそれでいいのかもしれないが、不足を感じられた。日本人って面白いって思ってもらえるくらい爪痕残す勢いでやり切らないとだめだ。これは学生の間に克服に貢献したい問題であり、挑戦と達成したいことでもある。日本人の学生は、積極的な様で自分のことしか頑張らないと私は捉えてしまいそうになった。団体が熱くなるのがあまり上手くないわけでもない、遠慮をするのが美学な時代は終わった。日本の学生の弱みだ。毎度残念味を感じる。熱くなることは気持ちいいことだということを知らないのかもしれない。本気で何かをする素晴らしさをまだ気付いていないのかもしれない。

今後の展望としては、文化交流などの機会があるときには先陣切って団体がダンスをしたい。個人ではなく団体がステージを呑み込むくらいの熱量のあるものにしたいのだ。今年四川大学のプログラムが通れば参加者全員で簡単なものでも良い、ダンスをしたい。ダンスも何事も最後は気持ちである。気持ちが入っていれば絶対に伝わるものだ。ダンスでなくとも、現地の学生が楽しめる、見ていて日本人と仲良くなりたいたいと思ってもらえる出し物を全力でやり切りたい。心から全力で思いを伝えないと相手に失礼である。中国への好意を日本人学生として、同じ地球人として真心を込めて愛を表現し続けたい。また、私は歴史への理解が足りていない。日中友好のためにこれからも向き合っていくなくてはならない不足点である。中国に対する理解と知識を極めたい。持続可能な社会のために世界平和は不可欠だ。人々の相互理解が重要だ。日本にいる日本人は日本が作ったイメージで中国を見ている。日本にいる日本人は本当の中国を知らない。否定的に見る者も少なくない。愛おしい中国の本質が伝わるた

めには、私たち若者世代が積極的に足を運び常にアンテナを張って新しいことを勢いよく飲み込んで、中国に行ったことがない親たちの世代の人々をも納得させるぐらいに、徹底して発信して力をつけるべきである。

「目で見て学ぶことの大切さ」 川崎晶穂

訪中団に参加する前、中国という国に対する印象はほとんど思い浮かびませんでした。中国人に対しても、声が大きい印象が強く、苦手意識がありました。訪中後は、中国に対しての見方が変わり、私自身の考えに大きな変化を感じています。また、この短期の訪中でも中国人に対して親近感が湧くようになり、中国人に対しての苦手意識がなくなりました。

初めて中国を訪れるにあたり、現代まで続く中国の長い歴史を感じる事ができたらいいなと考えていました。訪中団として実際に自分の目で見て学ぶことのできる機会を与えていただいたので、沢山の事を感じて得られる時間にしたいと強く思っていました。その中で、私は万里の長城に行くことが楽しみでした。実際に訪れてみて、昔の中国人の努力に驚きました。私たちが訪れたのは万里の長城のほんの一部に過ぎませんが、中国の歴史を肌で感じた瞬間でした。一段一段の高さが全然違うことも、途中で幅が狭まることも、全てが当時の人々の手作業により作られたものであるということを体感しました。また、北京に到着したのが深夜にも関わらず、車の交通量が多く、建物の灯りで街が明るかったことに驚きました。日本と比べて道路の車線が多いことや、一軒一軒の建物のサイズが大きいことなど、中国そして北京はこれからも発展し続けることを確信しました。訪中で訪れた万里の長城や故宮博物館、北京城市学院で体験した伝統文化など、中国には世界に誇る様々な遺産や文化があります。そして、若者の起業施設の見学をしたことで、世界の先駆けとなるような取り組みを行っていることを知りました。訪中を通して、中国は長い歴史を大切にしながらも新しい時代で進んでいる国であることを学び、感じる事が出来ました。

また、訪中団に参加するにあたり、日中の大学生との交流が楽しみでした。初めて出会う人たちとの団体行動、知り合いのいない中での海外渡航、同じ班の人たちとは仲良くなれるのか、不安なことは沢山ありました。しかし、班のメンバーと出会ってすぐに訪中前の不安は無くなりました。留学経験が豊富で語学が堪能、そして中国が大好きな班員たちとの出会いから、沢山の刺激を受けました。私は中国語がほとんど話せないため、中国の大学生とはあまり交流をすることが出来ませんでした。中国語が話せる班員が中国の大学生と流暢に会話している姿をみて、班員の語学力に感動をしたのと同時に、私ももっと中国語を勉強して会話ができるようにしたいと強く思いました。このメンバーに出会えたことは、私の人生において大きなポイントとなりました。

訪中団では、個人の観光旅行では経験のできないことが多くあったと感じています。歓迎会や日中千人交流大会など、帰国してから改めて素晴らしい経験をさせていただいたと感じています。人民大会堂の中に入れてもらったこと、千人大会の招待状をいただいたことは、特に忘れられない思い出となりました。中国人に対するあまり良くない印象も、文化の違いが影響していることが分かりました。中国に滞在していた期間に、中国人の声が大きいと感じたことはありませんでした。訪中前にもっていた中国人に対する印象は、あくまで日本で見た中国人であり、中国人の立場に立つと日本という異文化の中にいる中国人です。中国に限らず、世界には様々な文化があるので、イメージや先入観で判断してはいけないということを学びました。私は4月から社会人になります。今回の訪中で得た経験を活かし社会で活躍できるよう、さらに異文化を学び、広い視野で考えられるようになりたいです。特に、中国語の習得を目指し、私は訪中団の経験がきっかけで中国に興味を持つことが出来たのだと中国語で話せるようになり、中国人と友好的な関係を築くことができるよう頑張りたいです。訪中を通して、日本で世界の文化を学ぶだけでなく、実際に足を運ぶ大切さを学びました。

最後になりましたが、日中友好大学生訪中団に参加できたことを大変嬉しく思い、貴重な経験をさせていただいたことに感謝しています。ありがとうございました。

「中国の暖かさ」 瀨瀬 麻梨香

今回、初めて中国を訪れて、楽しい経験だけでなく新しい発見や多くの学びがありました。私はこの日中友好協会の大学生訪中団に参加するまで、中国に対してあまりいい印象を持っていませんでした。日中関係の政治的な関係については無知であったし、メディアで取り上げられる中国人像は決して良いと言われるものではなかったからです。しかし、実際に中国を訪れて中国人の方々と触れあうことで、彼らの暖かさや人間味を実感することができました。

まず驚いたことは、夜中に到着した私たちを暖かく迎えて下さったことです。これまでのメディアからのイメージにより、「中国人は自分勝手だ」という先入観があった私には、酷く冷え込む夜の中、私たちを待ち続け、迎え入れてくれた中国人の方の暖かさに感激しました。また、ショッピングに行ったとき、どのお土産屋さんにも日本人が訪中することを知っていたことも印象的でした。街全体が日中友好を望み、私たちを迎え入れてくれているようでした。その他にも訪れた現地の大学での交流会や歓迎会、すべてが手厚く、真心のこもったおもてなしをしてくれ、中国人の暖かさを感じる事ができました。たくさん的人数で大きなテーブルを囲み、食べきれない程の料理を楽しむのも、中国人の人との繋がりを大切に国民性から生まれたものなのかなと感じました。次に私が驚いたことは中国の先進性です。北京の中心部には斬新なデザインの高層ビルが多く並んでいました。日本の東京と

はひと味違った、近未来を感じさせる町並みにとても高揚しました。また、万里の長城のトイレには驚くべき機能がありました。並んでいる人の顔をモニターで認証し、トイレトペーパーを提供するというものです。紙の無駄遣いを減らし、さらに衛生面も考慮された革新的な装置だと思いました。日本では感じることでできない、異なる視点からの先進性を体感できたことも、このプロジェクトならではのと思いました。

また、今回は人民大会堂というとても厳粛な場で千人交流大会に参加できたことも嬉しかったです。多くの代表の方々が、互いに尊敬し合い、敬意を示していることが印象的でした。私たちは国際的な政治に直接的に関与することはできません。しかしこれからの未来を担う私たちが、互いに尊敬し、たたえ合い、互いの違いや共通点を認め合う機会はとても貴重なものだと思います。私が想像していたよりもずっと、中国人は日本人を認めてくれていたし、私も中国に対する認識が変わりました。こうした貴重な場に参加できたことをとても光栄に思います。これから就職活動をし、社会に出るにあたり、今回の経験は私の価値観を変えてくれた大きな出来事になりました。私と同じように中国に対して偏見を持っている学生に、新しい価値観が芽生え、世界が開ける感覚を経験してほしいと思います。そして私は、今回のプロジェクトで完結するのではなく、これから私たちが生きる未来に向けて、より中国への理解を深め、日中友好を推進できる活動をしたいと考えています。

「日中友好の懸け橋になりたい」 栄 七海

今回、私が青年訪中国に参加したのは、実際に中国に行き、文化を肌で感じ、現地の学生たちとの交流を通して、日本と中国の相互理解を深めていくためにはどのようにしたら良いのかを知り、その中で思いつく課題を見つけに行きたいと考えていたからです。訪中団というプログラムに参加するのは、2018年8月に参加した日本中国文化交流協会の大学生訪中団で2回目でした。1万円円で中国に訪問して、たくさんの文化に触れられるという機会に、また参加できたのはとても光栄でした。あの時1回目に参加して、日中友好に対する考えが深められていたからこそ、今回参加する時には、新たな発見があり、前回よりも思いが深く響くものがあるだろうという期待に満ち溢れていました。

初日の出発前の研修会では、日中友好についての話や同じ班同士の交流を深める機会がありました。これは5日間、共に訪中する中で思いを共有しあえるような仲を築くには、重要な時間のひとつに感じました。メンバーたちは皆、個性豊かで、ここでも新たな出会いの始まりでした。中でも、中国文化にとても興味があり、友好活動に積極的な人が多くて、訪中先で深い交わりができるだろうという楽しみがありました。

この5日間は北京に訪れましたが、初めて行く場所の方が多かったです。特に、印象的だった場所は天安門と故宮博物院でした。天安門は、教科書やテレビで見るよりも迫力があり、実際に足を運んでみなければ見えない周りの景色と共に、そびえているような感じてました。日本でも知られている、有名な中国の偉人である毛沢東の写真も近くで見れたのは良い機会でした。故宮博物院のなかは、予想以上の大規模で、今まで深くは触れて来なかった中国の歴史に対する探究心も深められました。まだ歴史に関する知識は乏しかった為、理解しにくいところはありませんでしたが、これも中国を理解するには必要不可欠だと思いました。また、博物院の周辺の景色は凍りついた川などの景色が写真にも残したくなるような美しさでした。

2日目の歓迎会では、各テーブルに中国人の学生一人を囲み、交流をする機会がありました。この機会は、中国の学生さんの学校や日常の話の中から中国においての日中友好の現状を知れたのが、すごく印象的でした。私と同じ席にいた学生さんは、北京城市学院のアニメ制作の学科に所属しており、日本語を同時並行で学んでいる人でした。彼は昔から、日本のアニメが好きで、将来は日本でアニメ関係の仕事をするにまで夢を持つようになったそうです。話によると、中国の若者たちは、日本のアニメがきっかけで日本文化が好きになる人が圧倒的に多いことが分かりました。中国で見られている人気アニメのほとんどが日本作であるため、日本文化を知らない中国人でも、日本文化に触れる環境は充実しているように感じました。このように考えると、日本においても日中友好をしらない日本人が中国文化を好きになれる何かがあれば良いなと思いました。私の中で浮かんで来るのは、中華料理はもちろんのこと、若者に共通するアイドルやドラマの存在だと思います。私自身も大学で中国語を始めて、中国文化に興味を持つまでは、中国のアイドルやドラマの名前は、日本では聞いたことはありませんでした。日本の学生達も、中国のアイドル、ドラマを知り、好きになることで、中国への好意を持つ人が、今後増えていくのではないかと思います。なので、日本でも日中友好促進のためにも、若者が中国の文化を好きになれる中国アイドルなどの存在をどのように知れ渡ってもらうかも重要な鍵になると考えています。

また、最終日前日に参加した日中大学生千人交流大会は、両国の考え方を知り、それぞれの日中友好について振り返ることができた良い機会でした。両国の学生の体験談や中国の合唱団が「君をのせて」を歌う姿を目の前に見て、共に寄り添う優しさを感じて、涙が出るほどに感動しました。この時に、私も将来、日中両国の懸け橋になりたいと強く思いました。

今回の訪中を通して、日中両国が将来、どのように関係を深めていくのが楽しみになり、私もこれから先、日中友好に貢献していきたいと思いました。そのためには、両国の意思伝達のための言語能力、常に謙虚な心を持ち続ける、歴史・文化を知っていくことが、今の私の課題なのかもしれません。

「先進性」 佐々木翔

中国はやはり面白い国であると思う。日本と違う面白さだけではなく、中国内でも行く先々で伝統や文化も違い、行くタイミングで天気も対応も何もかも違う面白さがある。前回自分が訪問した12日間は大気汚染で青空が見えなかったが、今回の5日間は運よく綺麗な青空が見えた。現地の人曰く、雨や雪が降ったりしたことで大気が綺麗になったそうだ。交通事情としては多くの人がイメージする通り、クラクションが飛び交い信号に関係なく歩を進める人が多くいるなど、スムーズな運行でないことが多い。しかし、道の整備に関しては車道と別にバイク・自転車道、歩道と分けられており、計画された街づくりが行われていることが窺われ、利用者のマナーに対して行政の街づくりが進んでいると感じる面白さがあった。

そんな中国は最近ではITや金融など様々な部分で最先端を走り、XiaomiやHUAWEIなどによる最先端スマホの製造販売やAlibabaやTencentなどによるインターネットサービスやフィンテックにより先進的なイメージが定着しつつある。

最近では中国の先進性ばかり注目されるが、今回の訪中でサービスやマナー的に先進的でない部分もまだまだあると感じることがあった。先進性で言えば、観光地の路上ではどの店舗でもキャッシュレス化が行われ、屋台であってもQRコード決済であった。しかし、スターバックスやマクドナルドなどのチェーン店が入っている施設でも、場所によってはコピー商品や低価格版の商品がその隣のテナントで販売され、近くに寄っただけで強い客引きをされるなど、先進性に疑問をもつ瞬間もあった。もちろんしっかりとした施設・店舗にいけばそんなことはないのだが、そういった場所では宝石店でさえ客引きをする。特に印象的なのは、店員の接客態度である。人が来るまでショーウィンドーに肘をつき、スマートフォンをいじる。宝石店でさえ店舗によってはそうで、服装も私服のTシャツであった時もあった。接客サービスへの意識は技術と比べ普及していないと感じる部分があった。

他にも、そういった場所で印象的なことは価格交渉をすると商品の値段が大幅に変動することだ。一つのぬいぐるみでさえ100元から18元の値動きをしたことがある。それを踏まえ現地の学生に毎日値切りが大変じゃないか聞くと、中国では値切りが上手く行っても行かなくてもそれが当たり前の日常になっており、失敗してもあまり悔しがらなく、普通のことであると教えてくれた。個人的に中国人は値段が安ければ安いほど良いと思いき、ビジネス的に揉めることが多いのかと思えば、意外と値切りが上手く行かなくてもしょうがないと思うところがあり、ビジネスだけを求めるのではないとそこで知ることができた。

しかし、コピー商品の多さやそういった面があるからこそ、現地の人には適正な値段で本物の商品が手に入る信頼できる大手インターネット通販で購入をする。だからこそ、中国のインターネットサービスは急速に浸透したのだと感じた。そういった、インターネットサービスが浸透している先進的な面とサービスやマナーが良いとは言えない後進的な様子が中国には混在している。しかし、それが中国の独特な雰囲気や醸し出す魅力の一つであると思う。

「訪中を終えて」 芝田莉子

私たち訪中団は12月20日から12月24日の間、現地の大学生との交流を通して相互理解を深めるために中国の北京へ訪れました。訪中前の中国の印象としては、世界遺産登録数が55個でイタリアと並び一位で、国土が世界一広く、その首都の北京は高層ビルや高層マンションが連なりとても近代的な反面、自動車や航空機、工場などで機械を酷使し排気ガスを大量に排出したことで、PM2.5などの大気汚染が環境問題に上がっていたり、食の衛生面に問題があるというものでした。私は今まで中国へ行ったことがなく、テレビやインターネットの情報を鵜呑みにしてしまっていた所があったので、どちらかというマイナスなイメージを持っていました。しかし、訪中団を通して実際中国に行き、自分の目で確かめた結果、中国への印象は大きく変わりました。

ホテル

ホテルでは、二人一部屋になって北京麗都景酒店に宿泊しました。ホテルは日本と変わりなく、水は硬水だったため食品用には使えませんでしたがとても居心地が良かったです。北京は非常に乾燥していたため、マスクや濡れタオルなどで乾燥対策をしなければなりません。

故宮(紫禁城)

「ラストエンペラー」で有名な紫禁城は24人の皇帝が暮らした城とされています。紫禁城の中は午門、太和殿、中和殿、保和殿などと書かれた看板があり、それぞれの場所に役割がありました。その時のガイドさんの話で、9は皇帝の数字と言われており、偶数の数が陰数、奇数の数が陽数、9は奇数の中で一番大きい数なので皇帝を表す数字と考えられていることを知りました。

食べ物

私たちは北京の中華料理屋で主に宮廷料理を食べました。日本と比べて中国のお米は水分量が少なくポロポロとした触感でした。料理は日本の中華飯店で売られているものとは全く違い、肉にきゅうりを使用するなど材料にアクセントがありました。また、出される飲み物は必ずスプライトかコーラなのはなぜなのかと疑問に思いました。餃子は蒸したものが多く、焼かれた餃子は中

国であまりないということも知ることができました。中国では火鍋が有名ですが一度も私は食べたことがなく、食べたときの美味しさと感動は一生忘れないと思います。

人民大会堂

私たちは12月24日、訪中団の4日目に人民大会堂で「中日青少年交流活動」に参加しました。ここでは私たち訪中団を含めた日本の学生と中国の方が1000人集まり、友好を深めるため様々な催しが行われました。中国側からは非常に歓迎していただき、日本と友好的な関係を築こうとしている気持ちが伝わってきたので私もそれにこたえたいと思いました。この交流会の後、安部晋三首相と習近平国家主席が人民大会堂で会見を行ったというニュースを見て、とても貴重な経験ができたのだと感動しました。

全ての日程を終えて

5日間の日程を終えて、スケジュールが濃く忙しい面も多々ありましたが充実感があり、短いようでとても長いように感じられた研修でした。中国の方は日本人にとっても暖かく、フレンドリーに接してくれ、訪中前に感じていたイメージとは180度違うのだということ身をもって体感しました。この5日間、中国に行ったことがない私にとって不安な旅ではありましたが同じ訪中団の皆と助け合い、仲間として行動できたことをとても幸甚に思います。この研修をきっかけに、私は中国への留学を決めました。中国語に興味を持ち、実際現地で体験し学んだことは、私が中国語をマスターしたいと思う決定打となりました。またご縁があり何らかのプログラムで公益社団法人様のプログラムに参加できれば、今後の進路開拓に精一杯努めていきたいと思っています。この度は多くの有意義な経験をさせて頂きありがとうございました。

「日本人の『食わず嫌い』をなくすために」 住友 広樹

まず初めに、私を日中友好大学生訪中団のメンバーに選んでいただいたことに、非常に感謝しております。北京での4日間はあっという間でしたが、大変有意義なもので、私の人生に大きな影響を与えたと考えております。

最も大きな収穫は、中国に関心を持っている学生が集まり、互いに学び合えたことです。私は2016年、大学1年生のころに初めて旅行で中国を訪れ、肌で触れた中国の文化に感激し、それ以来北はハルビン、南は深センまで、20余りの都市を訪問してきました。しかし、個人での旅行がほとんどであり、一人で有名な観光地を巡り、名物を食べ歩く「一人旅」で終わってしまうことがほとんどでした。なので、今回のように大勢で大円卓いっばいに並べられた中華料理をつついてにぎやかな時間を過ごし、旅の感動を分かち合えたことは、深く印象に残っています。大学で中国語や中国文学、中国史を専攻していたり、留学経験があったり、自分より中国に精通している仲間も多く、多くのことを教えてもらいました。このように、中国をつながりとして大学や学年、都道府県の垣根を越えた素敵な仲間と出会い、互いに学び合えたことは、いつも一人旅ばかりしてきた私には、刺激的な経験となりました。

私は今回の訪中前、次のように考えていました。日本人の多くは中国(人)に対してマイナスのイメージ(公共の場所でせわしく喋っていたり、食事を残したりなど…)ばかり持っているようで、よく不平をこぼしています。実際、私の多くの友人は、頻繁に中国を訪れている私に対して「そんなところ行って危なくないの？」などと声をかけてきます。しかし、彼らのほとんどは、一度も中国を訪れてみたり、日本にもたくさんいる中国人と接してみようとしたことすらありません。実際に訪れるなり交流するなりしてみれば、中国は日本と同じくらい治安がよく、安心して暮らせる国で、温かい人ばかりだということがわかるはずですが、なのに、「食わず嫌い」であるために、中国に対するマイナスのイメージがさらにマイナスのイメージを生み、悪循環をきたしていると思います。私は、隣国の中国と仲良くしていくためには、単一民族の島国で育ってきた日本人の、排他的な、この「食わず嫌い」を打開しなければならないと思っています。そのためには、どうすればいいのか。今回の訪中団でヒントを得ることができました。北京城市学院の訪問、長富宮飯店での歓迎会および日中大学生千人交流大会では同年代の学生と交流する機会がありましたが、アニメや漫画といった日本文化が大好きな彼らは、いきいきとした目でそれについて語っていました。そのつながりで、中国国内でも多くの仲間を作り、今回の交流に参加するに至ったようです。日本人である私も、その話に引き込まれるようでした。私が中国に携わるようになったきっかけは、中華料理や中国の楽曲、中国の鉄道旅行の楽しさでした。これを、自分の旅行のエピソードと交えながら、日本の友人たちにも伝えればよいのです。全員が全員興味を示すかはわかりませんが、これが、いくつかの人の中国に対する「食わず嫌い」をなくし、中国に踏み出す第一歩となってくれればと思っています。このように、まずは自分の身の回りのレベルから、日中関係の改善に貢献できればと思っています。

「中国で感じた、日中友好への道」 館 由利香

中国は日本にとって、経済的にも歴史的にも、最も関連の深い国と言える。そしてアジア最大の先進国である中国と日本が手

をとりあっていくことは、今後の両国の進展のために非常に重要である。しかし私自身は中国の文化や歴史に対しての理解が不十分であり、今回の訪中団における最大の目的は、中国の文化に肌で触れ親しむこと、現在の北京の街の様子を知ることであった。また、日中の友好関係をより強固にしていくために自分にできることは何か考えたいと思っていた。

5日間の中国訪問を通して、北京の街を肌で触れて知ることができた。北京は想像以上に精練された大都市で圧倒された。高いビルや、広く整備された道路の近代的な街なみもあれば、長い歴史を感じさせる街も車窓から眺めることができた。個人の商店は比較的少なく、食品の配送サービスが一般的であること、自転車のシェアリングサービスが充実していることなど、東京での暮らしと異なる部分も多く興味深かった。天壇公園や故宮博物館などでは、中国の悠久の歴史を感じると共に、日本の歴史的建造物との共通点も多く、日中の昔からの結びつきの強さを実感した。また、現地の学生やガイドさんのお話を通して、中国の人々の考え方の違いについても知ることができ印象に残っている。例えば、日本以上に身分を重視すること、一度会った人との関係を大切にすることなど、人間関係の築き方も日本人とは少し異なっていた。このような違いを理解することは中国の人々との関わりを円滑にするうえで重要だと感じた。

さらに、今回の訪中団は私にとって日中友好について考える大きな礎となった。そもそも、国と国との関係が友好であるというのはどのような状態だろうか。国際的な友好関係には外交的な側面と、国民それぞれの持つ意識の両方の要素があると思う。しかし外交的関係も多くの場合国民の意思を反映して決定されるという意味で、国際的な友好関係は、国民それぞれがもつ感情に依存していると言える。では、国民が他国に対し友好的な感情をもつためには何が必要か。第一に文化や歴史を理解し、その価値を認め合うことが重要であると思う。その意味で今回の訪中団を振り返ると、多くの日本の学生メンバーが中国の言語や文化に関心をもっていった。大学で中国史の研究をしていたり、中国の歌を歌うことが好きだったり、中国の文化に親しんでいる学生が多かった。同様に、北京城市学院の学生も、歓迎会で日本のアイドルの演目を披露してくれたり、大学で日本のアニメーションについて学んでいたりと、日本の文化に深く関わっていた。このようにお互いの文化を知り、共に楽しむことこそが異国間での友好関係を深めていく一番の近道だと感じた。私自身も今回の訪中を通して、ますます中国の文化に興味をもつようになった。

また第二に、産業における協力も友好的関係を強める一助になると思う。私は現在大学で医学を勉強しているが、今回の訪中は医学での国際交流に関わりたいと考え始めるきっかけとなった。特に中国は、高齢者の増加につれて高度な医療の需要が今後ますます高まっていくと考えられる。これから私自身も中国語の勉強をすすめ、医学分野での日中友好に関わりたい。

「新しい発見」 松山実玖

今回で8回目となる中国への旅。しかし、北京を訪れるのは今回が初めてだった。高校生の時、世界史の資料集に載っていた紫禁城の美しさに惹かれ、いつか必ず行くと心に決めていた。大学では東洋史を専攻し、北京への思いはますます深まっていた。また、国際交流に関心を持ち、留学生の生活や学習のサポートなどを日々行っている。実際に中国に行き、故宮をこの目で見たい、そして中国の大学に通う学生と現地で交流したい、という2つの希望がこのような日中友好協会の日本青年代表団という形で実現し、大変うれしく思う。

今までの北京のイメージは、国の政権を司る場所ゆえ、漠然と華やかで賑やかなイメージを持っていた。しかし、実際に足を運ぶと、冬であったせいか、静かで厳かな印象を受けた。実際に見る故宮は、こんなにも大勢の観光客がいるのにもかかわらず、まったく圧迫感を感じないほど広大だった。この場所に歴代の皇帝がいたのだと思うと感慨深いものがある。もっとも時間があれば、と思うほど魅力的な場所であった。ぜひもう一度行きたいと思う。

今回の訪中の前も後も、中国に対するイメージはよかった。まず食べ物がおいしい。そして自分の意思表示がはっきりしている。ただ、トイレ事情だけは日本の方が快適だと痛感した。「ここは4つ星のトイレだよ。」とガイドさんがおすすめしてくれたトイレでさえ、あまり快適だとは思えなかった。トイレトーパーはなく、ドアのかぎも心もとなかった。日本の温かい便座、多様な機能、そして衛生管理の徹底は素晴らしいと思う。しかし、ここ数十年で、中国を取り巻く環境は劇的に変化してきている。15年前、初めて中国に行ったとき、町は臭く、あちこちにごみが散乱し、路上に居座る人々がたくさんいた。まだ幼かった私にはとてもこわかった。しかし、十数年ぶりに再び訪れると、町にはきれいな分別されたごみ箱が設置されていて、驚き感動し、ついごみ箱の写真を撮ってしまった。今回の訪中のなかでも、故宮博物院でティッシュペーパーがポケットから落ちてしまったとき、ゴミ回収のおじさんがものすごい勢いで、おそらく「ここにゴミを捨てていくな!」というようなことを中国語で言っている光景を目のあたりにした。中国はこれからもどんどん変わっていくだろうと思う。

印象深い出来事がもう一つあるので紹介したい。それはショッピングでのことだ。最近では中国においても商品に値札がついていることが一般的になってきたが、値札がなく、値段を交渉する文化があることを身をもって実感した。それに気づいたのはショッピングが終わったあと、友達と買い物について話をしているときだった。同じ商品を私の方がとても高く買ってしまったことを知り、ショックを受けた。どのようにすればよかったのか尋ねると「納得いく値段でなければ買わなければいいんだよ。」と教えてくれた。日本にいるときは、モノにはほとんどの場合、商品に値札が貼ってあり、多少の高い安いはあっても、平等な値段で買うことができた。しかし、今回は自らの価値観と交渉によってモノの値段が大幅に変化した。不平等だと不満に思ったが、モノの値段というのは決められたものではなく、決めるものなのだ痛感した。これも中国と日本の買い物の文化の違いといえる。

日本人学生と交流する時間も長く、留学経験などさまざまな話をする事ができ、多くの刺激を受けた。また、中国という共通の関心のある友達ができ、とてもうれしく思う。今回の訪中をきっかけにして、今後は中国と日本の懸け橋として友好事業に貢献していきたい。全日程において、中国側からの熱烈な歓迎を受け、おもてなしをしていただいた。今度は私が中国からの学生を歓迎する側として活動したい。

「特に印象に残った中国のトイレ事情と中国人との関わり」 山本梨華

中国で困ったこと、それはトイレである。北京に到着した翌日、北京城市学院を訪れた。中国文化体験と学生との交流が終わり、私はトイレに行った。壁も扉もなく全くプライバシーに配慮していないニーハオトイレと呼ばれるものが中国に存在することは知っていたが、さすがに大学と言うこともありちゃんとした個室だったので安心した。しかし、個室に入った後トイレトペーパーがないことに気づいたのである。出て周りを見渡してみると、洗面台のところにトイレトペーパーが一つあった。そこで自分で必要量を取り持っていく必要があったのである。また、興味深いと感じたのは万里の長城のトイレである。入り口に入ってすぐのところに、顔認証でトイレトペーパーが出る機械があった。その機械を使ってみたところ、10cmほどのトイレトペーパーが出てきた。短すぎて笑ってしまったのを覚えている。日本人ならトイレトペーパーのロールを1回転以上使うであろう。料理店では、店員がトイレトペーパーがなくなったらすぐに取り換えられるように、トイレトペーパーを片手にトイレの前で待機していた。予備のトイレトペーパーを置いておいたら持ち帰ってしまう人がいるからなのだろうか。私は今までに東南アジアを含め何か国か旅行に行ったことがあるが、トイレトペーパーが個室に備え付けられていないなど初めてとても驚いた。日本よりも優れていると感じた点は、洗面台に必ずと言っていいほどハンドソープが備え付けられていたことである。

次に私の中国人との関わりについて述べる。まず、私の中国に向かう飛行機内での経験である。飛行機で私の隣の席は中国人だった。私は中国語を話すことができず、キャビンアテンダントが飲み物や食事について聞いてきたときどうしようととても緊張していた。案の定キャビンアテンダントは中国語で聞いてきて私は指差して会話を図ろうとした。それを見ていた隣の中国人は私が中国語を話せないことを察し、キャビンアテンダントに説明してくれたのである。早速中国人のやさしさを感じた場面だった。また、訪中二日目の夜の歓迎会では、中国の大学生と交流した。最初は中国語で何を話そうかと考え緊張していたが、中国の大学生は日本語が堪能で圧倒されてしまった。彼らが話す流暢な日本語を聞いて、中国の教育レベルの高さや学生の学習への意識の高さを感じた。日本語を学んでいることや日本のアニメが好きだという話を聞いて日本に対して悪い印象はないのだと感じた。私は今回日中友好大学生訪中国に選出され、初めて中国に行ったが、大学で中国語の先生から中国についての話をよく聞いていたこともあり、中国に対して全く悪いイメージを抱いていなかった。訪中後の今も同感である。一方で私の親戚の中国に対するイメージは著しく悪い。彼らは訪中したことも関わったことすらないのに中国に対して酷評である。私は今回の訪中での経験を彼らに話して少しでも中国に対するイメージの改善を図ることに努めたいと思った。

私は他にも印象に残ったことがたくさんあった。訪中で中国のことを知れただけでなく、日本の他の大学の学生とも仲良くなれたことが良かった。しおりにのっていた日中友好のためにはまず日中友好という言葉が印象深い。なかには中国語が堪能な人や中国に何度も行っている人がいてとても刺激を受けた。日本の大学生の代表として訪中した経験を忘れずに、今後も日中友好のためにまずは中国語の習得に励みたい。